

よく聞かれることがある。  
「レーサーにはなろうと思わなかったんですか？」

こう聞かれるたびに、私はいつも決まって、こう答える。  
「ならないよ。速いから怖いもん。」

でも、本当の理由はそんなコトじゃない。  
自慢じゃないが、私はふてぶてしい。そして、頭が悪い。  
だから、幸か不幸か・多少のことでビビるほど細い神経は持ち合わせていないのである。  
正直に「その」質問に答えると、最終的に自尊心が傷付くから、あえて  
まともに返答しないだけなのだ。

たまに、ピットなどでドライバー同士のハナシを横で聞いていると感銘を受けることがある。  
やれ、タイヤの使い方がどうの、エンブレを有効に使うにはどうの、それはそれは  
聞いていて飽きないほど興味深いハナシをしているものだ。

なにより歴然とドライバーの凄さを感じる瞬間、それはやはり走行中である。  
カートあがり、4輪の操作にまだ慣れていないドライバーなどが運転する時は特に。

ラップを重ねる毎にタイムが縮んでいく。  
最終コーナーからの立ち上がりの音が変わっていく。  
目の前の通過速度が変わっていく。  
ラインが決まってくる。  
最初はぎこちなくても、アツっという間に、クルマに慣れてしまう。  
どうすれば乗れるのか、という段取りを体で覚えているのか、考えているのか。  
その辺は定かではないが、とにかく「順応力」という意味合いで特筆すべきである。

どんな人でも練習すれば、結構なレベルまでクルマを転がせるようになるはずだ。  
要は、その発展の階段を昇るスピードが早いか、遅いか。の違いなのだろう。  
運転者の努力と鍛錬によって開花するか、アドバイスなどの環境によって開花するか。  
それは、人それぞれなのだろうが。

いずれにせよ、レーシングスピードで周回するには、相当アタマを使わないといけないだろう。  
刻々と変化する状況を正確に把握し、冷静なおかつ度胸もなきや。根性一発、だけでもダメ。

自分自身がサーキットを走る、とイメージしたとき、または実際に走っているとき  
はたして、どこまで「レーサー」しているだろうか？  
正直なところ、コースインしたら即全開。様子を見る、というコトが無い。  
そして、いきなり無理めな所までつっこんでみる。  
本人は頑張っているように感じているが、ロスが多い。結果として遅い。

本当はタイム云々より、まずやらなきやいけない基本的なことがイッパイあるのに。

その、最も重要な基本が自分に欠落していることを知っている。  
クルマを作る立場だから、それが余計にイタイほどわかる。  
レーサーの根幹ともいえる「考えて走る」「状況を拾う」能力が著しく劣っている。

「レーサーにはなろうと思わなかったんですか？」

なれないのである。

「全開」「フルブレーキ」「カウンタ」が、どうにもこうにも好きなのである。  
男なら、開けなきゃ、突っ込んでどうする！？ と思っちゃうのである。  
スピードレンジが低くとも、クルマが暴れるのはワクワクするのである。

さすがに、ドライバーと話す時には、まさか「男なら死んでも突っ込め」とは間違っても言えず。  
そこはそれ、まともに受け答えしているつもりではあるが。  
でも、いつかポロっと言っちゃいそうだ。  
「こんじょーで突っ込んで、ねじ伏せて曲がってよ。」

イカンイカン。

(24Dec2003)

